

久々の大学セミナーハウス訪問と富田玲子氏のレクチャー、味わい深い時間だった。富田氏の話で興味深かったのは、大学セミナーハウス(本誌6512)の第4期の設計で「これまでのものとは違うものをつくる」として、第1~3期は食べる、寝る、集まるという機能を分けたのに対し、第4期は、機能をまとめて大きな家として設計したことであった。

普通の人々の感覚としての多様なモダニズム

レクチャーの後、質問をした。「インターナショナルスタイルの一義的価値観と象設計集団の建築との関係」である。モダニズムはCIAMや近代建築5原則の普遍的価値観により、世界中どこにでも成立するというインターナショナルスタイルを展開したのに対して、象設計集団のヴァナキュラーな立ち位置が対照的だったからである。富田玲子氏の応えは「そこに合っているものをつくる。普通の人ならこうなると考えることをやっている」であった。その立ち位置は、お人柄と同様、自然体なのである。モダニズムの側面には、用と形の整合性があるが、

用を普通の人々の感覚と置き換えると自然体の中にその整合性を見出すことができる。

保存利活用をまちづくりで捉える

会場である大学セミナーハウスの見学では、各建築が自然の起伏に対して「刺さる」「もぐりこむ」「盛り上がる」「斜面に生える幹」の多様性を楽しみながら考えた。DOCOMOMO選定の素晴らしい建築がなぜ解体されてしまうのか、耐久性や経済的理由などいろいろあろうが、ポイントは普通の人々の理解とのギャップではないか。つまり普通の人々の感覚が、その建築や街の価値を捉えていなければ残るはずであ

る。今、カイロで住民参加の保存まちづくりに関わっている*。ゴミや交通問題などのテーマで建築家のファシリテーションにより住民ワークショップをする中で、住民は街のよさや建築の価値を理解し、どのように更新すればよいかを、専門家と行政と一緒に検討している。これらを通して「普通の人々の感覚」と「専門家の感覚」がブレンドされ、サステナブルで有機的な建築と街づくりに繋がるのである。吉阪隆正氏の不連続統一体と富田玲子氏の普通の人ならこう考える、にしっかり重なった。

(連健夫)

*文化庁、令和4年度カイロ旧市街の持続可能な保護策のための事業/住民参加のまちづくり。



富田玲子氏。



見学会の様子。大学セミナーハウス本館。



DOCOMOMO選定された吉阪隆正の作品や重要文化財となったDOCOMOMO選定建築物をパネルで紹介。